

宮城の「下町ロケット」 光の威力に翻意

放射光が拓く未来(2)

2019年10月8日 6:30 [有料会員限定]

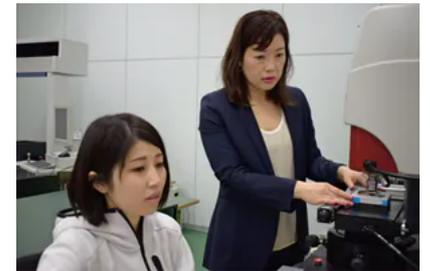
小惑星探査機「はやぶさ2」が7月、世界で初めて小惑星の地中にある砂や石の採取に成功した。採取した物質を収める容器の開発には従業員約60人の町工場、ティ・ディ・シー（宮城県利府町）も参画している。

砂や石が容器内で削れないように、容器内部の表面を摩擦が起こりにくくするためツルツルに磨く。その研磨技術は世界的にも有名で、取引先は海外にも広がっている。

そんな宮城の「下町ロケット」はいま、兵庫県佐用町の大型放射光施設「SPring | 8」（スプリング8）を使い、研磨による金属などへのダメージについて研究している。社長の赤羽優子は「きっかけは高田先生との出会いだった」と振り返る。

「放射光？私には関係ないよ」

2017年12月5日、東北大学の産学連携マッチングイベントに参加した赤羽は放射光に無関心だった。翌6日、光科学イノベーションセンター理事長、高田昌樹からメールが届いた。「御社の研磨技術を高度化することができます。ぜひチャレンジしましょう!」。赤羽は「『え?』って感じ。不安しかなかった」と振り返る。



赤羽社長(右)は地元企業に放射光活用を呼びかける(9月2日、宮城県利府町)

年が明けた18年1月、スプリング8へ銅とステンレスのサンプルを送り、表面のなめらかさを計測してもらった実験を始めた。「2週間はかかるだろう」と考えていたが、データ計測は1秒で終わった。「放射光の威力を痛感した」赤羽はスプリング8の活用とともに、次世代放射光施設への出資を決めた。

次世代放射光施設での目標は25年までに新製品を出荷することだ。「表面だけでなく、中の細かなひずみまで調べ上げて『何年使っても大丈夫』と保証できる、医療や宇宙分野で使う品質の高いものを提供したい」と意気込む。

一方、赤羽は当初の自身のよう、次世代放射光施設は自分に関係ないという考えが広がっていることを心配する。「どんな企業でも放射光を通して大きく飛躍するチャンスはある。別の世界の話と割り切るのはもったいない」



今中社長は次世代放射光をビジネスチャンスと捉える(9月11日、仙台市)

そんな中、赤羽の話をきっかけに放射光を巡る世界に飛び込んだのが、仙台市内で13店舗のビジネスホテルを運営する松月産業（仙台市）だ。

次世代放射光施設とは無縁な業界に見え、社長の今中美恵も「放射光施設を直接使うつもりはない」とあっさり話す。今中はその狙いを「放射光を使う企業との交流を持つことで、宿泊拠点にしてもらうことを目指している」と語る。

次世代放射光施設を核とした研究拠点「リサーチコンプレックス」周辺には宿泊施設は建設されない見込みだ。ただ、同施設を使う研究者は1週間など長い期間滞在する場合もある。「大きなビジネスチャンスになる」と商機を見いだした。

今中は企業へ営業をかけ、次世代放射光施設を使う人向けの割得なプランをつくる予定だ。法人契約も用意し、長期滞在にも備える。「地場チェーンとして存在を知ってもらう機会にもなる」。次世代放射光施設はホテルをも動かしている。

(敬称略)

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

No reproduction without permission.